

2018年度ユニーク卒論

神 学部

担当教員名	橋本 祐樹
論文執筆者名	西脇 聡子
論文の題 (テーマ)	スピリチュアルペインからの回復 — キリスト教信仰の意味に注目して —
簡単な内容 (概要)	<p>近年、宗教的な領域を超えて医療の領域においても「スピリチュアルケア」が学術的に繰り返し議論されます。そこでは、人間は単に身体的、社会的な存在としてではなくスピリチュアルな存在として捉えられ、病や家族の死など様々な人生の危機において人間が経験する深い次元の痛みについては「スピリチュアルペイン」と称されます。この卒論は、自殺率の観点からも示されるように、特に「生きづらさ」の痛みを抱えやすい青年期の学生を対象にして、質的調査に基づく実証研究に取り組みます。半構造的インタビューの手法から、キリスト教の信仰がそのような学生のスピリチュアルペインからの回復プロセスにおいてどのような意味を持ちえたかを探求するのです。結論の一つとして、キリスト教信仰は他者との関わりの中でその機能を豊かに発揮することが提示されています。</p>
推薦の理由	<p>WHO も認める人間のスピリチュアルな側面を取り上げて、特に人間が多様な危機に際して経験する「スピリチュアルペイン」からの回復プロセスにおいて、キリスト教 (信仰) がどのように意味をもったかを、実証的な研究手法を通じて探求しているこの卒論は、以下の意味においてユニークだと思えます。</p> <p>まず、その方法論についてですが、特にキリスト教の実践研究において、日本ではそのような手法ではまだ十分な研究が展開されていないという状況があります。この卒論は、キリスト教神学を実証的な研究手法で進めることの豊かな可能性を示唆します。</p> <p>次に、その主題設定と結論にも関わりますが、「生きづらさ」を抱えて生きる青年層の多さが論じられる状況を念頭に置いて、この卒論は、取り組みの可能性としてのキリスト教 (信仰) を提示します。他者との関わりを通じてこそその真価を発揮するものとしてキリスト教 (信仰) を示すというのは、繰り返しなされてきた月並みな主張かもしれませんが、確かな手法と手続きを通じてそれを改めて確認することには一つの意味があるでしょう。</p> <p>最後に付言すれば、執筆者の学生自身が「生きづらさ」を抱える中で、信じることを通じて回復のプロセスを経験したという点も確かにユニークです。</p> <p>神学的研究や調査の徹底性としては尚不十分な点は認められますが、以上の豊かな内容を含むことからこの卒論を「ユニーク卒論」として推薦いたします。</p>